

## 国語科総論

## テーマ 「柔軟な思考力を育む授業づくり」

## 1. テーマ設定の理由

新しい中学校学習指導要領の平成24年度全面実施に向けて、本校国語科においても「確かな学力」の習得を目指した授業づくりを行ってきた。昨年度までの3年間では本校の研究テーマ「言語活動の充実」をうけて、全ての基礎となる「思考力を育む授業づくり」を教科のテーマとして研究を進めてきた。言語活動を「感受・表現」「理解・伝達」「解釈・説明」「評価・論述」「討論・協同」の五要素から考え、どのような活動ができるか、その中でどのような思考力を養うことができるかを整理、分類しながら、授業づくりを行った。昨年度の「思考力を育む授業づくり」の視点は以下の3点である。

- ①生徒一人ひとりが「方法」を身につけ、その「方法」を活用できるような単元を構成する。
- ②ノートやワークシートに文字言語化し、自らの思考の過程と他者の思考の過程を客観的にとらえ、認知することで、多様な思考力をつける。
- ③②の学習に深まりを持たせるために、協同学習を取り入れる。

昨年度の成果として、単元構成を初めに「方法」を示してから、その「方法」を活用できるような流れに工夫をすることで、思考の過程について一度経験したことを同じように反復できるので、他の学習での活用にもつながった。そのため、生徒の主体的な学習にも結びつけることができた。また、自分や他者の思考の過程をワークシートやノートによって視覚的に認知することにより、他者の意見を取り込んだり、自らの思考を深めることができた。その経験から、子どもたちの学習や生活の中でも、他者と対話する中で考えを深めようとする意識が育ってきた。

しかし、思考力を育むという点においては、子どもたちに示すことができた「方法」は十分ではなく、整理されたものではない。また、自分や他者の思考の過程を認知することにより思考を深めることができたが、そのような活動を設定する時に適切な課題を提示することができず、逆に子どもの思考を停滞させることになる場面もあった。生徒の思考の深化、多様化にはどのような課題があり得るのか、課題の設定については引き続き研究していく必要がある。

以上のような課題をふまえ、本年度国語科では、「柔軟な思考力を育む授業づくり」をテーマとし、それを支える「論理的な思考力」を育むことに重点を置いて研究を進める。本校生徒の実態として、話し合いや討論において、ひらめきで自分の意見を言うことのできる生徒も多いが、論理的に考え、その考えを論理的に表現するという課題が見られる。そこで、論理的な思考力を育てるための8つのスキルを活用しながら言葉の力を育む授業づくりの研究に取り組むこととした。

## 2. 本年度の研究について

「思考力を育む」ことに重点を置いて、昨年度までの3年間は自分や他者の思考の過程を認知しながら思考の「方法」を身につけ、活用できる授業づくりを行ってきた。本年度は「柔軟な思考力」を支える「論理的思考力」を高める授業づくりについて考えた。国語科において論理的思考力を高める授業とは、生徒に言葉としっかり格闘させ、その言葉を活用して思考、表現する力をつけることができる授業であると考え。よって、柔軟な思考力を身に付けるための思考スキル整理し、意識的かつ効果的に授業の中で指導し、活用させながら、言葉にこだわる授業づくりを目指した。

昨年度までと引き続き、単元構成については、学んだスキルを活用しながら定着させることができるよう構成し、また、学習の中に「論理的な思考力」の活用が必要となるよう、協同学習の場面を設定、その中で自分や他者との対話を行う中で思考の過程を明らかにしながら、その過程や方法を認知できるような場面を設定するようにした。

本年度は、論理的な思考力の8つの要素を意識的に用いて、言葉の力を育むことに重点を置いている。

その思考スキルをどのように活用することで言葉の力をつけることができるのか、どのような活動をすればどの思考スキルを使い、どのような言葉の力を獲得できるのか様々な教材において、つけたい言葉の力を明確にしながら、そこで扱う思考スキルを位置づけしていく。本年度、本校で取り組む8つの思考スキルを国語科では次のように整理する。

表. 柔軟な思考力を身に付けるために大切な思考スキル

	思考スキル	教科としてのとらえ方	活動の具体例
1	分類する	グルーピングすることで、その特徴や性質を明らかにする。	分析に必要な部分を付箋に書き出し分類する。
2	関係づける	言葉、文、段落のつながりや関係を考える。	文章構成をマッピングで示す。
3	比較する	言葉や文章を比べることで得た共通点や相違点をもとに、表現の特徴や評価について考える。	比較読みをすることで、要約のポイントについて考える。
4	順序づける	読解や表現において、ふさわしい順序や重要度を考える。	発表原稿の構想表の作成をする。
5	類推する	分類・関係・比較・順序づけなどから得られたことをもとに考える。	説得力ある文章の工夫について考える。
6	評価する	分類・関係・比較・順序づけなどから得られたことを根拠・理由とし、その内容や書き方の妥当性について考える。	文章や他の人の意見について、批評する。
7	要約する	文章や話の全体をとらえるために要約する。	書き手の意図に沿った要約をする。
8	構想する	効果的に表現するための道筋を考える。	付箋を使い発表原稿の構想表を作成する。

以上のように整理した8つの論理的な思考のためのスキルを授業の中で活用しつつ、それを基盤に協同学習の場面などを通して自分や他者の思考を認知することで、柔軟な思考力を育み、言葉の力の獲得につなげていった。

### 3. 成果と課題

本年度の研究で、8つの思考スキルについて整理し、思考スキルを意識した授業づくりをすることで得られた成果として2つのことがあった。

まず、生徒たちの思考スキルの活用である。授業の中に思考スキルを焦点化して位置づけることで、生徒たちも自分たちがどのような力を使って思考しているのかということを知り、学習した思考スキルを他の場面においても活用できていたことである。自分自身の思考はもちろんのこと、班での話し合いにおいても、4人の意見について考え、まとめていく中で、積極的な思考スキルの活用が見られた。

次に、シンキングツールの活用である。頭の中だけで思考するだけでなく、自分にも他者にも思考の過程がわかりやすいように視覚化することで、思考されたものをより一層深化拡充することができた。付箋を使用したグルーピング、カードによる段落の関係性、文章構成を図示したマッピングの作成など、付箋、カード、マッピングといったシンキングツールを利用により、思考の過程が視覚化され、また、コミュニケーションも活発になるため、思考の深化拡充が見られたのだと考えられる。

ただ、授業の中で思考スキルを意識しながら学習するが、一度の学習や本人の活用だけに任せるとその思考スキルの定着が見られないこともあった。そこから、思考スキルを意識した授業の組み立てと合わせて、思考スキルそのものの取り立て指導の必要性を感じた。また、生徒たちがどのような思考スキルを学習したかすぐに復習できるよう、思考スキルの活用についてまとめたプリントの配布も効果的ではないかと考えられる。来年度からの研究において、これらの課題の可能性について考えていきたい。

## 〈参考文献〉

- ・中学校学習指導要領（平成20年度3月告示）及び解説
- ・新しい教育課程における言語活動の充実 財団法人 学校教育研究所 学校図書 2010年
- ・思考力育成への方略－メタ認知・自己学習・言語論理 井上尚美 明治図書 2007年
- ・中学校新教育課程国語科の指導計画作成と授業づくり 高木展郎・三浦秀一 明治図書 2010年
- ・論理的思考力を育てる授業の開発 中学校編 市毛勝雄・長谷川祥子 明治図書 2003年

1. 単元名 論点をとらえる「流氷と私たちの暮らし」

2. 単元観

生徒はこれまで説明的文章を読み、文章構成や段落の役割について理解する学習を進めてきた。また、文末表現や文章の書かれ方から筆者の工夫について考えてきた。そして、説明的文章を読む際には指示する語句や接続する語句に着目することが大切であるということを理解してきている。

これらの「読む」ために身に付けた力は「書くこと」にも役立てることができる。生徒は自らが体験した本校の体育大会である『附中杯』の魅力伝えるという作文を書くときや友達が書いた詩の推薦文作りにおいて構成を考え、接続する語句を適切に使用することで分かりやすい文章づくりを心がけた。しかし、多くの生徒達は、書き方を理解していても多くの事柄のうちどの事柄を書き表せば良いのかが分からないようであった。これは、日常生活で心を感じ取ったものごとや見聞きした情報をたくさん持っていても、いざ表現するときに話題・材料を取捨選択し、まとめて表現していくことが苦手だからではないだろうか。このことから、これまで構成・段落・指示する（接続する）語句について学習してきたが、今後、生徒が論を展開していく場でより分かりやすく伝えるために自分の考えや情報をまとめていく力が必要であると感じる。

そこで、本単元では「流氷と私たちの暮らし」という説明的文章を読み、筆者の主張を考え、文章の要約の仕方を考えることで、今後の言語活動における適切な論の展開のしかたを学ばせたい。

「流氷と私たちの暮らし」は序論・本論・結論という三部構成で成り立っている。内容では、流氷という一つの自然現象が地球環境でどのような役割を果たしていくかを見ていく中で、一見関係のない自然現象と自分たちの暮らしのつながりが見えてくる構成になっている。そして、「身近な自然をしっかりと観察し、大切にしていくこと」という筆者の訴えで結ばれている。生徒にとっては、三つの構成であることは把握しやすく、また筆者の主張も捉えやすい文章であるといえる。また、要約は目的に応じて仕方が異なることや、まとまりの中心部分・支える部分を考え出すことが必要である。このことを協同学習を通して、考え出し、気づき、話し合うことで要約力を身に付けさせていきたい。また、「流氷と私たちの暮らし」を読み進めてから「流氷新聞づくり」に取り組みさせていくことで、話題・材料を取捨・選択し、まとめていく力が身についたことを確認できるだろう。

3. 単元の指導目標

- ・文章の中心となる部分やそれを支える部分を読み分け、要約し環境問題についての自分の考えを広げさせる。

4. 単元の評価規準

ア 国語への関心・意欲・態度	1 筆者の着眼点に着目し、積極的に文章を読もうとしている。 2 作品を読んで、考えたことを書いたり、発表したりしようとしている。
イ 書くこと	1 伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書いている。
ウ 読むこと	1 構成（序論・本論・結論）や本論の3つのまとまりについて構成を把握している。 2 文章の中心となる部分を捉えて、筆者の主張を要約したり要旨を捉えたりしている。 3 図表と文章との関係を考えながら書かれている内容を読み取っている。

<p>エ 言語についての知識・理解・技能</p>	<p>1 文章を読んで意味の分からない語句を辞書で調べ、文脈上の意味を考えている。 2 説明文を読む上で指示語や接続語及びこれらと同じような働きをもつ語句などに注意している。</p>
--------------------------	---

5. 単元計画 8時間 (◎は本時で4時間目)

学習内容	ねらい	中心となる思考スキル	評価規準
<p>・「流氷と私たちの暮らし」を読み、観点に基づいて感想を持ち、接続語や指示語を捉え段落構成を考える。 (2時間)</p>	<p>・新たな発見や驚きなどを通して、自分の考えを広げさせる。 ・接続語や指示語から段落の関係に着目し、文章が三段構成をなしていることを把握させる。</p>	<p>・段落のつながりや関係を考える。 【関係づける】</p>	<p>アー1 アー2 イー1 ウー1 エー1 エー2</p>
<p>・「流氷と私たちの暮らし」を読み、文章の中心となる部分を見つけ、筆者の考え方を捉えて要約する。 ◎いくつかの要約文を比べ、班で検討し、要約について考える。 (3時間)</p>	<p>・要約文を比べ、目的に応じた文を比べて要約の仕方が異なることを理解させる。 ・それぞれのまとまりには中心となる段落や文とそれを支える部分があることを捉えさせる。 ・流氷や自然と私たちの暮らしとのつながりを考えさせる。</p>	<p>・「新聞」の記事を書くため分かりやすく要約することを考える。 【要約する】 ・いくつかの要約文を比べる。 【比較する】</p>	<p>ウー1 ウー2 ウー3</p>
<p>・「流氷新聞」を作る。 (3時間)</p>	<p>・要約文や図表、身近な自然と私たちの自然の関わり等を使い、記事にまとめさせる。</p>	<p>・サブタイトルや見出しを考える。 【要約する】</p>	<p>ウーイ</p>

6. 本時の目標

要約文を比べ、書き方やまとめ方についての特徴を捉え、要約に必要な事柄を考える。

7. 本時の展開

	学 習 活 動	教 師 の 指 導	備 考
導入	<p>・前時を振り返る。 ・本時の目標を確認する。</p>	<p>・前時までのまとめと本時の目標を確認させる。</p>	
展 開	<p>・「流氷と私たちの暮らし」のいくつかの本論の要約を比べて読む。  ・各班でそれぞれの要約文がどのような考えでまとめられたか考え発表する。</p>	<p>・前時に行ったいくつかの要約を提示し、異なる点や共通する部分に線を引き、それぞれの要約文の特徴を捉えさせる。 【比較する】 ・いくつかの要約文を比べ、どのように書かれているか考える。  ・班で考えたことを発表させる。</p>	<p>・ワークシート ・実物投影機 ・プロジェクター ・ミニホワイトボード</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表後に予約の仕方について考える。</li> <li>・各班から出てきた意見から、要約するために必要な事を考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・検討した事柄を踏まえて考えさせる。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>【要約する】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どのような要約の仕方が良いのか考えさせる。</li> </ul> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・要約の注意点や着目するところ等も発表させる。</li> </ul>	
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時のまとめをする。</li> <li>・次時の学習内容の確認をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習内容を振り返らせる。</li> </ul>	

### 8. 結果と考察

国語科では「柔軟な思考力を育む授業づくり」を支える「論理的な思考力」を育むことに重点をおいた研究を進めてきた。この実践では、その論理的な思考力を育てるための8つのスキルのうちの1つである「要約する（文章や話の全体または部分を短くまとめる）」を身につける授業づくりに取り組んだ。

生徒たちは、本校に入学して初めて学習する説明文『ダイコンは大きな根?』で「要約する」ことを既習している。しかし、そのときの要約は各段落の中のキーワードを探し出し、そのキーワードをつなぎ合わせ短くまとめる。そして、各段落の要約文をひとまとめにするという流れ作業的な要約であった。生徒たちは、要約とは文章や話を短くまとめることであるということは学習したが、文章や話の柱、つまり書き手や話し手の伝えたいことを読み取りながらまとめていくことは出来ていなかったように感じた。また、要約はただ単に自分が理解するためだけにまとめるものではなく、まとめたものを他者に発信するということが日常生活において必要になってくる。よって、発信目的や相手によっても要約の仕方や表現が変わってくるということを学習させる必要性を感じた。そこで、再び説明文『流水と私たちの暮らし』で、新聞形式でこの説明文を読んでいる人に向けて内容を伝えるための要約をしていくことに取り組んだ。

第一次では、文章中の接続語や指示語を捉えながら段落構成を考えた。要約するためには、全体構成を捉えて作者の考え（結論）や内容を把握する必要があるからである。既習の接続語の意味・役割を思い出しながらどの部分がまとめの部分なのか、段落や文章がどのようなつながりをしているのかを考えながら全体内容を把握させていった。



第二次では、本論部分の要約文を書くことに取り組んだ。要約させていくと、文章とほとんど同じ量の要約文（文の数は同じで、ただ単に一文を少し短くしたもの）や『ダイコンは大きな根?』時と同じく各段落を短くまとめて、その後ひとまとめにしていく行程を踏んでいた生徒が多かった。後者の方法でも良いのであるが、結論部分に向けてどの部分が必要・不必要であるのかを考えずに機械的に要約しているのである。少人数であるが、本論中のまとめりごとにまとめて最後にひとまとめにしたという方法をとっていた生徒もいた。

そこで、いくつかの生徒の要約文を見比べながら、それぞれの要約文はどんな相手に読んでもらうといいのかを考えさせてみた。すると、文章をあまり削らずに書かれた教科書文そのままの要約文は、内容をあまり知らない人や初めて読む人に向けての要約であり、簡潔にまとめた要約文は既読者や流水や環境問題をかなり知っている人に向けての要約ではないかという意見が生徒の中から出てきた。このことから、要約文とは伝える相手や目的によって書き方が変わるものであるということを生徒たちは理解してきたのではないかと感じた。ここで、『流水と私たちの暮らし』を読んでいない人に向けて新聞という形式で伝えてみよう、と「流水新聞（仮題）」作りを提言した。

その後、順に要約していく方法ではなく、一部生徒の要約方法であった小段落より大きいまとめりごとに要約していく方法を考えさせた。本論部分の3つのまとめりの中で要約するときに見落としとしてはいけないであろう段落を各班で考えさせ、なぜそう考えるのか理由と共に発表させた。すると、接続語「つまり」の入る段落は結論であるために見落としとしてはいけないであろう、と考える班が多く出たのである。段落と段落のつながりを読み取りつつ、小段落ではなくで大段落の中での重要な部分の読み取りをしながら、まとめていく方法もあるということ徐徐に理解してきたのではないかと感じた。しかしながら、文章の書き手である作者の考え、つまり、結論部分に向けて大切である部分を読み取りながらまとめていくという考えをもつ班は1つもなかった。文章全体を要約させずに、本論部分のみの要約であったために結論（作者の考え）へのつながりを考えることができなかつたのであろうと予想される。要約するときには、書き手の伝えたいことに向けてまとめていくことが大切であることを教師側から伝える結果になった。

この実践により、生徒は目的や相手により要約の仕方が異なるということや、要約方法はひとつではないということは理解したであろう。だが、書き手の考えや伝えたいことを常に頭において要約をせねばならないということが生徒たちの学び合いの中から出てこなかったことから、生徒たちの理解度は高くはないであろうと感じる。また、説明文で要約を行うことにより、話すときや書くときにおいても要約は必要になってくるのだということまで考えを及ぼすことができなかつた。今後、この実践で学習した「要約する」という思考スキルがどんな場でも活用できるように、話す・聞く、書く授業においてさらに身につけられるような取り組みを考えていきたい。





実践2 2年生

授業者 坂口 智子

1. 単元名 論理をとらえる ～立場と根拠を明確にした説得力のある表現を学ぶ～

2. 単元観

本校2年生は、日々の授業でワークシートや作文などを書かせても、一定の字数を書くことができる生徒が多い。意見文においても、おおよその生徒が原稿用紙をある程度埋めることができる。

1年生では単元「事実をわかりやすく伝える」において、説明文「未来をひらく微生物」の中からわかりやすい文章を書くために必要なことを学習した。そして、総合的な学習のまとめにおいて、国語で学習した例示やナンバリングなどを使ったわかりやすい文章を書くための工夫を活用し、レポートを書いた。また、スピーチや他の場面でも、わかりやすく伝えるための工夫を意識して取り組む姿が見られる。ただ、表現する場面で、自分の言いたいことをわかりやすく伝えようとする努力は読み取れるが、いかに効果的に自分の意見に説得力を持たせるかという点においては、まだ弱い部分がある。

そこで、本単元「論理をとらえる ～立場と根拠を明確にした説得力のある表現を学ぶ～」では、論説文「モアイは語る」を読み、筆者の論理の展開の仕方からわかりやすく、説得力のある表現の方法を学び、それをいかしてテーマに沿った意見文を書く活動を行う。

論説文「モアイは語る」は、モアイ像の語る文明崩壊の謎について説き明かすことで、限られた資源を有効に利用しないと地球環境や文明崩壊の危機に陥ってしまう、という筆者の主張を支えるわかりやすい文章構成となっている。ただ、本論に書かれるモアイ像を持つ文明崩壊の謎の解明は、ヤシの木の伐採がもとで森が破壊された事実については、花粉を根拠・理由として論証されているが、他の部分についてはその部分ほどもしっかりと根拠・理由が書かれていない、というわかりにくさも持っている。しかし、「有限の資源を効率よく、長期にわたって利用することが人類の生き延びる道である」という筆者の主張を最も支えているのが、前述したヤシの木の花粉に裏付けされる森林破壊の部分であるため、文章全体が説得力を持つものとなっており、その部分を含む話の展開が、筆者が考えた思考の過程に沿って展開されているため、読者にはわかりやすく、説得力を持つ文章として受け取られる。

生徒の実態としては、「説得力ある」文章には、事実や根拠がしっかりと示されているということは、今までの学習活動の中で経験的に理解している。しかし、その事実や根拠がどのようなものであればよいのか、どう表現されているとよいのか、そして、それらの事実根拠も展開の仕方次第で説得力が変化するという点までは認識できていない。筆者の主張を支える本論での根拠・理由の提示の仕方や展開を学習することで、生徒たちはわかりやすく説得力のある文章表現の工夫を獲得することができるだろう。また、そこで習得した説得力ある文章表現の工夫を、意見文を書く学習の中で活用することで定着できるように単元としたい。

3. 単元の指導目標

- ・文章の構成や論理の展開をとらえ、説得力ある文章の書き方について理解させる。
- ・自分が伝えたい事実や事柄を明確にして、文章の構成を工夫させる。

4. 単元の評価規準

ア 関心・意欲・態度	<p>1 論理的な文章を読む楽しさを味わい、筆者の意見に関心を持つようとしている。</p> <p>2 自ら設定した課題について、自分の立場を明確にしなが、主体的に取り組もうとしている。</p>
イ 書くこと	<p>1 自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にし、文章の構成を工夫する。</p> <p>2 書いた文章を読み返し、語句や文の使い方、段落相互の関係などに注意して推敲する。</p>

ウ 読むこと	1 文章の構成に着目し、まとまりの役割や論理の展開の仕方をとらえる。 2 文章中に示された事実や根拠を的確に読み取り、筆者の意見を理解する。
エ 言語についての知識・理解・技能	1 目的に応じて文章の構成や論理の展開の違いがあることを理解する。 2 文末表現など、語句の効果的な使い方を理解する。

5. 単元計画 9時間 (◎は本時で、5時間目)

学習内容	教師のねらい	中心となる思考スキル	評価規準
「モアイは語る」を読み、序論・本論・結論に分けて、マッピングで文章構成について考える。(2時間)	範読し、新出漢字や何回語句の確認をしながら、「モアイは語る」の文章構成について考えさせる。	各形式段落に書かれていることを要約し、関係性を考える。 【要約する】【関係づける】	アー1 ウー1
本論の筆者の論理の進め方について、問いと解明の方法、解明された事実を確認しながら分析する。(2時間)	「問い」と「解明の方法」「解明した事実・答え」を整理することで、筆者の主張を支える論理について考えさせる。	本論における筆者の「問い」「解明の方法」「解明した事実・答え」という書き方を考える。 【関係づける】	アー1 ウー2
◎「モアイは語る」の持つ説得力がどこにあるのかを分析し、文章の持つ説得力に必要なことを考える。(1時間)	根拠・理由と主張との関係性から、説得力ある文章に必要なことについて考えさせる。	筆者の主張に説得力が出るよう、内容・表現・構成がどのように支えているかについて考える。 【関係づける】	アー1 ウー1 ウー2 エー1 エー2
キャリア学習「仕事とは何か」の考察結果について、発表原稿を書く。(4時間)	「モアイは語る」で学んだことを活用し、説得力を持った文章になるよう、主張と根拠・理由の関係性について考えながら、発表原稿を書かせる。	自分の主張をどのようにすれば説得力を持って表現できるかを考える。 【関係づける】【構想する】	アー2 イー1 イー2 エー1

6. 本時の目標

- ・筆者の書き方の工夫から、説得力ある文章に必要な要素について考える。

7. 本時の展開

学 習 活 動	教 師 の 指 導	備 考
○説得力ある文章に必要なことを、筆者の書き方から学ぶことを知る。	●前時までの学習を振り返り、説得力ある文章に必要なことを、筆者の書き方から学ぶことを知らせる。	目標の掲示
○班で、前時に筆者の書き方について分析した付箋を用いて、説得力あるところ、ないところについて話し合い、分類する。	●それぞれの付箋に書かれた筆者の書き方についての分析を、ただ発表するだけでなく、内容について検討することをおさえる。 ●どのような観点で分類するか説明する。	画用紙

<p>○分類したグループに名前をつけ、ホワイトボードに書き出して前に貼る。</p> <p>○「説得力」ある文章に必要な要素について、検討する。</p>	<p>●分類したものに名前をつけ、ホワイトボードにまとめることを指示する。名前は短くまとめた形でつける。つけにくい場合は、できる範囲でまとめるよう伝える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【関係づける】 分類した意見に共通することを考え、名前をつける。</p> </div> <p>●〈内容〉データ・事実・根拠・理由・裏付け等 〈表現〉比喻・文末・使用語句等 〈文章構成〉説明の順序・問い→説明→考察等以上のような意見が生徒から出ると考えられる。内容や表現で重要なことをおさえた上で、それに加えて構成の仕方が「説得力」に影響することを考えさせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【関係づける】 それぞれのまとまりが、どのように関連して筆者の主張を支えているか考える。</p> </div>	<p>ミニホワイトボード ペン・ボード消し</p> <p>実物投影機</p>
<p>○次時に、学習した書き方を使って、「キャリア学習」の発表原稿を書くことを知る。</p>	<p>●本時の学習で学んだ説得力ある文章の工夫を活用し、「キャリア学習」の発表原稿を書くことを知らせる。</p>	

## 8. 結果と考察

今回の実践では、1年生で学習したわかりやすく伝える文章の工夫をふまえた上で、説得力ある文章の工夫について学習した。そのため、単元構成の工夫として、説明文「モアイは語る」から説得力ある文章の工夫を学び、それを生かして、単元の最後に総合的な学習「キャリア学習」のまとめ発表の考察部分にあたる「仕事とは何か？」をテーマにした発表原稿を書くことを、学習活動に位置づけた。

まず、第1次として説明文「モアイは語る」を読み、筆者の主張を読み取る。そして、筆者は自分の主張をどのようにして説得力あるものとして支えているのかを分析しながら読むことから、説得力ある文章に必要な工夫について考えることとした。この説明文は、人類が生き延びていくためには、有限の資源を長く効率よく利用していかなければならないのだという主張を述べるため、イースター島の歴史をたとえとして用い、主張をより説得力あるものとして支えている。モアイの話など興味をひく題材であるため、生徒は意欲的に説明文を読んでいくことができた。文章の分析においては、思考スキルとして、【関係づける】力に焦点化した。そこで、説得力ある文章のための工夫点について考える際、思考を視覚化し協同で考えやすくするために、シンキングツールとして付箋を使ったグルーピングを行った。そして、グルーピングした具体から一般化した名付けをし、文章の工夫点として整理をした。生徒自身が本文を読んで、これは説得力があると実感したところ、疑う余地がないと感じたところ、こんな書き方をしているからもっともらしく感じてしまうと思ったところを付箋に書き出していく。生徒たちにとっては今までも経験的に、説得力を持たすためには「具体例があった方がよい」「データなど証拠となるものがよかった方がよい」などわかっていることもあるが、実際に他の人が書いた文章から具体的に分析していくことで、同じ具体例でもどんな内容がより説得力を持つか、具体例の信憑性についてなど、既有的知識を用いながら、文章や言葉にこだわり、

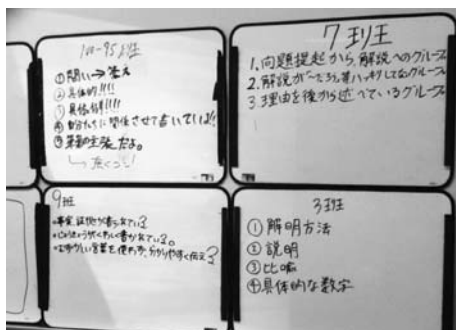


思考することでより深い知識へと深化拡充することができた。また、付箋を使ったグルーピングは普段の授業の中でもよく行う活動なので、生徒たちもスムーズに活動することができた。ただ、グルーピング後の一般化する作業においては、そのグループの名付けにふさわしい言葉が見つけれなかったり、1語で表現する班もあれば、1文ほどの長さになってしまう班もあり、難しい作業となった。その点においては、どのような形で名前を付けるのかなど、例示とよりていねいな説明が必要であった。

説明文「モアイは語る」での学習をふまえ、キャリア学習のまとめ発表の中の考察部分「仕事とは何か」について、キャリア学習を通して考えたことを説得力を持って相手に伝えるための原稿を作成した。生徒たちは、仕事とは「お金のため」「自分のため」「人のため」「社会のため」「生きがい」など仕事の定義を考えた。それから、それぞれの定義を聴く人により説得力を持って伝えられるよう、キャリア学習の中で学んできたことや、職業体験を通して自分が実際に体験したことを根拠として吟味していった。その活動の中でも、自分の考えを支えるための決め手となる体験談を探そうとしたり、学習した内容だけでは説得力に欠けると感じ、新たに調べたことを付け足して根拠にしようとする生徒も見られた。そして、具体例や資料の吟味だけでなく、どのように構成する方が、自分の主張を伝えるために効果的かを考え文章を組み立てようとする生徒もいた。「モアイは語る」のように、仕事とは何かという定義にいたる道筋を、思考に沿って書くことで説得力を持たせようとしたり、仕事の定義を説明するための理由の軽重によって書く順序を考えたり、仕事をそのように定義したいくつかの理由の関係性を考えて構成を考えるなど、書く内容だけでなく、その構成についても考えることができていた。

このように、モデルとなる文章からその筆者の書き方を分析し、そこから自分の文章を書く時にいかせることを学んでいくという活動は、経験的に何となくわかっていたことをはっきりと認知し、知識として蓄えることができる学習である。そのうえ、既存の知識についても深化拡充された。また、他の人の文章を分析することで、自分の文章を作る時にもどのようなところを考えながら書いていけばいいのか、思考の過程をより具体的に認知し、活用することができるようになるのではないだろうか。

ただ、課題としては、文章を分析することに時間を費やすため、その文章内容の持つおもしろさを十分に味わうという点では薄くなってしまっているところがある。読書という点においての説明文を読む楽しさ、内容のおもしろさを軽視してはならないので、どの作品を使用するかなど考えながら指導していく必要があるかなど、その二つのバランスを年間の指導計画の中考えていく必要がある。また、日頃の書く活動や読む活動において、今回学習したことを意識させ、定着を図る必要がある。



↑  
〈グループに一般化した名前を書き出したミニホワイトボード〉

〈構成をつかみ、段落の関係を視覚化したマッピング〉 →

